ヴァーチャル・リアリティ時代に生きる神学研究

小原克博
（大学神学部助手）

わたしは学生時代アルバイト先で神学部の学生だと言うと、しばしば不思議そうな顔をされた。将来は神社の神官になるのですね、と言われ困惑したこともあった。それほど「神学」という言葉は、我が国ではまだまだ理解されていない。

それでも、「神学」という言葉が日常生活でまったく用いられていないわけではない。ただ、決まって否定的な使われ方をしているのだ。例えば、A氏とB氏の対談が「神学論争」に終わったと論評されるとき、それは具体的な実りを生みださない議論に終始したということである。そこでは「神学」という学問に対して下された一つの歴史的評価が端的に表されている。

では、現代において神学を研究の対象とすることは、どのような積極的意味を持つのだろうか？そのような問いかけが、いつもわたしの関心の基底にある。この課題は、同志社大学とキリスト教主義精神の関係とも重なりあっていく。

それだけに、わたしは神学やキリスト教の中に、この世のセキュラーな関心から接近可能な汎用性を備え、同時に、わたしたちの生活感覚に新たな整合性をフィードバックする力を追求したいと思っている。そのためにキリスト教神学は実に雑多な遺産を残してくれている。一見、無用の長物と思われる神学論争の中にも、意外と現代の最先端につながっていく認識の過程を見いだすことができるのだ。

例えば、ヴァーチャル・リアリティ。もともと、ヴァーチャルという言葉の起源は中世の神学者ドゥンス・スコトゥスにさかのぼる（彼は、ものの概念は経験的属性を形式的にではなく、〈仮想的に〉含んでいると主張した）。しかし、ヴァーチャル（仮想）とリアル（現実）の緊張関係は、すでにあらゆる宗教現象の中に見られる。土俗共同体における仮面をかぶった祭りに始まり、優れた文学や音楽との出会いに至るまで、人間はどこか現実とは違う場所に連れ去られることを楽しんできたのである。

ところが、そもそも太古の時代からヴァーチャルな存在であるはずの人間が、技術革新の地響きの中で、現実と仮想を行き来するための平衡感覚に不安を持ち始めている。また、情報の大波にもてあそばれ――カルト宗教もその波間で暗躍している――、身体感覚は希薄なものになりつつある。歴史の中に繰り返し現れてきたグノーシス主義的誘惑は、今もわたしたちの身近にあるのだ。

神学的遺産を現代の光のもとに掘り起こすことによって、多層化した「この世」を生きる知恵を広く共有したいと願っている。

化学反応と生命現象

小寺政人（大学工学部助教授）

生体内反応及び種の保存などを含む全ての生命現象は、幾つかの化学反応の積み重ねによって実現されている。従って、全ての生命現象は化学の言葉で説明されるはずである。しかし、生体のシステムはあまりにも複雑すぎるために、生物そのものの研究だけでは、生命現象を完全に化学的に解明することは困難であり、多くの場合、それは不可能とさえ言える。そこで、私の研究は、①生命現象のエッセンスだけを取り出してこれをモデル化し、②このモデルを用いて生命現象の機構を完全に化学の言葉で解釈することです。このような観点から、生体内において酸素分子との関わりから特に重要な働きをしている金属タンパク質に注目して、以下のような手法で研究を進めています。まず、金属タンパク質の活性部位（タンパク質の働きの中心部分）と同様の構造をもつ金属錯体（タンパク質などの生体物質と比べてはるかに単純な構造をもつ低分子量の合成化合物）を設計・合成する。次に、この金属錯体を用いて金属タンパク質の働き（機能）が再現されるかどうかを調べる。もし、その機能が金属錯体によって再現されたならば、そこには化学と生命に共通の反応が起こっている事になり、その生命現象の化学反応は、自然科学的に一般化されたことになります。そして、この単純なモデル系を用いて詳細な反応機構を解明することにより、生命現象を化学の言葉で説明することを目指します。以上が私の研究の基本概念です。

このような研究を目指すようになった簡単な経緯を示します。私の化学に対する興味は中学にはじまり、高校の時には、生物の教科書や参考書をみて化学反応と生命現象が密接な関係にあることをおぼろげながら知りました。高校3年の受験勉強の頃に、生物の参考書などを読みながらDNAを中心とする遺伝情報の発現・再製・維持がきわめて化学的に行われていることに強い興味を感じました。生物の参考書を読むことが、つまらない受験勉強のほんの少しの気晴らしにはなったように覚えています。大学に進学すると、生化学や有機化学を知り、より具体的に化学反応と生命現象について考える有り余るほどの時間が与えられました。大学の3年生ぐらいになると、将来、化学と生物の接点の研究をしたいと希望するようになったように覚えています。私の研究略歴は大学4年の時に研究室配属された時から始まるわけですが、その後、多くの紆余曲折を経て、現在に至っているというところです。

和歌の道—Waka as a Way of Seeing

N. J. Teele（女子大学教授）

私は二十五年前から『古今和歌集』を愛読してきましたが、最近、『古今集』はway of seeing と理解できるのではないかと考えるようになってきました。

九世紀の始めから長年漢文や漢詩の陰に隠れていたやまとことばが、『古今集』と同時に再び表舞台に登場したことは『古今集』選者達の苦労に負う所大であったと思われます。まず選者達は漢語に対してやまとことばの人と自然の関係を改めて考えねばならず、次に、人の経験と自然との関係を三十一文字で表現するために何が必要かと言語の限界等を考えねばなりませんでした。その結果一つの世界観が生じましたが、その世界観の中心をなす人と言語と自然の関係を『古今』思想と呼んでもよいと思います。

『古今集』の作品を勉強することにより周囲の物事や出来事をよりよく感知できます。自然という知恵の泉の水を和歌を通して飲むことができるといえるかもしれません。また和歌は他者に作者が気付いたことを伝えもします。これらは『古今集』の教育的役割と考えられます。

このquestioning and realizing attitudeは古今風の特徴ですが、私にとって今特に興味あるのは『古今集』の和歌における言語観です。言語観の立場から考えますと春の始めを歌っている「春歌上」の一番から三番は言葉の適切性を問題にしていると思われます。

一　ふる年に春たちける日よめる
　年の内に春はきにけりひととせを
　去年とやいはむ今年とやいはむ

二　春たちける日よめる
　袖ひちてむすびし水のこほれるを
　春たつけふの風やとくらむ

三　題しらず
　春霞たてるやいづこみよしのの
　吉野の山に雪はふりつつ

最初の歌は社会的、言語的条件…同一年内に、ある月が二回繰り返される…を問題にしており、「人間には言語に縛られている時と言語に惑わされている時がある」ことを示唆しています。二番目の和歌も言語の意味を問題にしており、「春立つ日」という表現の適切性に関して「この言葉は十分に適切ではない。春は人間の命令だけでくるものではない」という見解が示されます。三番目の歌は自然現象を表わす言語の適切性を問題にしています。つまり「春」という言葉の概念は実際の自然の現象と必ず一致するとは言えない、時間や場所によって違う、という選者達の指摘があるのです。

うまく説明出来ませんが、このように分析すると、『古今集』の言語観の一つの次元がわかると思われます。これは『古今集』に見られる世界観とway of seeing の教えの一部だと思われます。

『古事記』に見える「大御葬歌（おおみはぶりうた）」

藤原享和
（高等学校教諭）

「『私の研究』という欄に何か書くように」というお話をいただきましたとき、正直言って当惑致しました。と申しますのは、私はまだ「勉強」中の身でありまして、大学の先生方がなさいますような「研究」というレベルのことはとてもなし得ていないからでございます。従って、本稿も「私の勉強」と言うほどの意味で書かせていただきますことをお許し下さい。

私の興味の中心は日本の古代文学、特に『古事記』、『日本書紀』、「祝詞」等でございますが、ここ二、三年は『古事記』の中巻に書かれております「大御葬歌」について勉強させていただいております。

『古事記』は、東征帰りの倭建命（やまとたけるのみこと）が能煩野（ぼの）で亡くなった直後に倭（やまと）から后や御子たちがやってきて、次のように歌い、それが天皇の葬儀に歌う歌（「大御葬歌」）の起源になったと記しています。

・なづきのたの　いながらに　いながらに　はひもとほろふ　ところづら
・あさじのはら　こしなづむ　そらはゆかず　あしよゆくな
・うみがゆけば　こしなづむ　おほかはらの　うゑぐさ　うみがは　いさよふ
・はまつちとり　はまよはゆかず　いそづたふ

『万葉集』の挽歌が明らかに哀悼の情に満ちた表現をとっているのに対し、「大御葬歌」は現代人の私達が表面的に読んでも、いったいどこに死者を送る情が表現されているのかはっきりしません。『古事記』はこれらの歌をどのように「読む」ことで「葬歌」として記録したのでしょうか。「大御葬歌」を正確に葬歌として理解するためには、『古事記』の時代に立ち戻り、その頃の天皇の死に伴う一連の儀礼（「死」→「殯宮」→「葬送」→「埋葬」の四つの儀礼段階が考えられます）の中のどの儀礼段階（「場」）でこれらの歌が歌われるべきものであったかを明らかにする必要があります。その儀礼の中にこれらの歌を戻してやってはじめて葬歌としての意味が現代人の私達の前にも現れてくるのではないでしょうか。

従来は「殯宮」段階に「大御葬歌」の「場」を求める研究が多かったのですが、私はその場を「葬送」、「埋葬」段階と考え（拙稿「『大御葬歌』の場について」日本歌謡学会『日本歌謡研究』第三十五号）、それに基づいて『古事記』が求める「大御葬歌」の解釈を探る試みを続けています（拙稿「『古事記』第三十四番歌の解釈をめぐって」甲南大学古代文学研究会『古代文学研究』第二号）。